

循環成長型アートプログラムの方法と実践 IV

村上 誠

こども健康学科

Methods and Practice of Circulating and Growing Art Programs 4

Makoto MURAKAMI

要 旨

乳幼児のアートの活動を「循環し成長する」ものとして、作品という一点に留め置かれぬアートの活動を『循環成長型アートプログラム』と名づけ、次の3つの枠組みでアートプログラムを開発している。①素材との出会い、②手法との出会い、③テーマとの出会い。本稿は、その4回目の報告であり、「テーマとの出会い」の実践を取り上げ、「見ることの再発見」というテーマで、ゆるやかにつながった1年間の活動を報告する。<もの・こと・ひと>を見ることから始まり、最終的には幼児がカメラという機材を通して見た光景を、一つの立体作品に再構成することを試みた。

キーワード：循環成長、アートプログラム、プロジェクト型保育、デジタル写真

Abstract

We develop art programs with the following three frameworks by defining infant art activities as "circulating and growing" items and naming art activities that are not only limited to a work as "Circulating and Growing Art Programs": (1) meeting with materials; (2) meeting methods; (3) meeting with theme. This article is the fourth report and take up a practice, "meeting with theme". We will report one-year activities which were gently connected under the theme of "rediscovery in watching". We started from watching <items / matters / people> and finally tried to restructure views that infants watched through a device, camera into one three-dimensional work.

Keywords : Circulating and Growing / Art Programs / Project Type of Childcare / Digital Photo

はじめに

前稿¹では、絵本を通した「プロジェクト型保育」の試みを報告した。絵や文字への興味から始まり、子どもたちは絵本というメディアに出会う。そして絵本を通して、たくさんの〈もの・こと・ひと〉に遭遇し触発された子どもは、やがてそのメディアを自分のものとしてつくり出す。さらに、メディアの集積所である図書館に足を運び、濃密な知の空間で遊び・学ぶことを体験する。そして、そこでの体験をもとに大きな絵本をつくり、最後は自分たちでつくったメディア（＝絵本）を大人に向けて語りかける。つまり、これまでは大人が子どもに見せ・語るものであった絵本を、子どもが大人に見せ・語るものである。以上の実践は、年間を通してのプロジェクト型保育として試みた。しかし1年というスパンでの取り組みは初めてであったため、様々な矛盾が生じた。

本稿での実践は、前年と同じように島田市のY保育園で行った。新学期が始まると同時に、担任と筆者が年間を通してのアート実践をどのように進めるのかを話し合った。そこで出てきたのが、子どもの《五感の発達と成長》をテーマとしたアートの活動、中でも〈見る〉ことに焦点をあてる。子どもたちが毎日の生活の中で見つめる〈もの・こと・ひと〉に寄り添いながら、子どもたちが向かう未来の姿を、保育に関わる大人が考えるきっかけとするのである。そこでの方法として着目したのが、前年実施したコラージュ。「見る、選ぶ、切る、貼る」というコラージュの基本的な技法・行為を通して、子どもたちが自分の生きている“世界”をどのように見て、どのように理解し、そしてどのようなイメージの展開につなげていくのかを追ってみよう、というものである。

1 みる、えらぶ、きる、はる

まず、チラシ類による単純なコラージュを体験する。子どもたちが普段目にする〈もの〉を見つめ・選び・切り取る作業の後、それらを新たな視点で画面の上に再構成する。実践の方法は昨年と同じだが、素材や導入を細かく再検討しながら進めた。

実践 ①

“コラージュを体験する”

日時：2017年6月13日、男児6名 女児8名（男児1名が欠席したため、その子は翌日に実施）

時間的な流れは、以下のようなものである。

<p>■素材と道具、教材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チラシ（写真の多いもの） ・子ども向けの雑誌やカタログ（バラして置く） ・各種パンフレット（子ども対象のものが良いが、そうでないものも加える）

10:00	<p>・はさみ、造形糊、手拭き、蜜蝋クレヨン、四つ切画用紙（中厚）</p> <p>■導入</p> <p>子どもたちの前で、チラシから写真を一枚切って貼る動作を見せる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・素材（チラシなど）は、2つのテーブルの上に広げ、子どもたちが見やすいように置く。 ・作業はテーブルと椅子で行う。
10:10	<p>■実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何を選び、どのように切るか、貼るか、クレヨンを使うかなど、できるだけ自由度を高くする。
11:30	<p>■できあがったコラージュ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・できた段階で、保育者は、コラージュしたものの意味や物語を聞き取る。
12:00	<ul style="list-style-type: none"> ・片付けと昼食の準備 ・1日乾かしてから、重しを置いて画用紙の凸凹を直す。 ・翌日、壁に全員の作品を掲示する。

素材は、新聞に入ってくるチラシ類、写真が多い雑誌やカタログを冊子状態ではなく、バラして置いた（写真1-1）。各種パンフレットがあると良いが、子ども用となると容易には集まらない。そのため、一般向けのものまで中に含めた。



1-1



1-2

道具・教材は前回と同様、はさみ、造形糊、手拭き、描いた後もベタつかない蜜蝋クレヨン（シュトックマー社製）を使い、用紙は四つ切画用紙（中厚）とした。

導入は、子どもたちの前で、チラシから写真を一枚切って貼る、その動作を見せるだけにして（写真1-2）、細かい指示はしなかった。保育者はイメージを拡げるきっかけは提供するが、それ以上には踏み込まない。そこから先は子どもたち自身が考えるからだ。

切って貼る楽しさを体験するのが最大の目的であるから、制作の方法などもあまり踏み込んだアドバイスはしない。もっと続けたい子には、八つ切り画用紙を追加提供したが、次回に絵本のようなものをつくることを予定しているため、この日は、切って貼るという単純な遊びに留めた（写真1-3）。でき上がった段階で保育者は、コラージュしたものの意味や物語を聞き取り、じゃまにならない程度に画面に鉛筆で書き込む。1日乾かしてから、壁に全員のつくったものを掲示する。

チラシの量と種類の選択が難しかった。これは今後の課題としたい。1時間半の活動だったが、ほとんどの子が時間を延長して制作を続けた（写真1-4）。



1-3



1-4

2 みる、えらぶ、きる、はる & つなげる

2 回目の実践は、シンプルなコラージュから一步進めて、イメージの拡がりをもとにした遊びの進化・展開を体験する。単発的なイメージから、つながりのあるイメージ（物語）をつくりあげる。

実践 ②

“コラージュで、絵本”

日時：2017年7月21日、男児7名 女児8名
時間的な流れは、以下のである。

	<p>■素材と道具、教材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回と同じようなチラシ、パンフレットなどに、その他のものを加えた。 ・はさみ、スティック糊、蜜蝋クレヨン ・用紙（厚手の四つ切画用紙を、縦と横に切ったもの） ・ホッチキス
10:00	<p>■導入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単純に貼ることから進展させるために、イメージのつながりを促すような言葉がけを試みる。この時、画用紙の縦と横のパターンを見せる。
10:10	<p>■実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自由に制作できるようにする。 ・途中、蜜蝋クレヨンでの描画、文字の書き足しも促す。 ・表紙は、本体ができてからの方が良い。
11:50	<p>■できあがった絵本</p> <ul style="list-style-type: none"> ・できあがった絵本は子ども同士で見せ合い、読み合いを試みる。 ・この日だけで終わらず、さらに続ける場合も考慮して、材料や教材はいつでも使えるようにしておく。 ・この絵本は、また使うことがあるから、家には持ち帰らず、保育室に保管しておくように伝える。 ・小さな子に読んであげることもできることも提案。
12:00	<ul style="list-style-type: none"> ・片付けと昼食の準備

活動時間は2時間を予定していたが、実際にはまったく足りず、翌週（7.24）も活動は続いた。素材は、これまでと同じようなチラシの他に、子どもが興味を示すかは疑問だったが英字新聞、またインターネットで拾い集めた花、家、動物、乗り物などの写真をプリントしたものを用意した。結果として、ほとんどの子どもたちは英

字新聞には興味を示さず、写真には強い興味を示した。写真は、どのようなものをどれくらい必要か事前に検討したが、結論が出ず、花や車などを数枚ずつ用意した。どれも人気があり、全体に不足気味だった。絵本（冊子）にするため、乾いても皺がでにくい合成（スティック）糊を使った。

用紙は、厚手の四つ切画用紙を、縦と横に半分に切ったもので、それを2枚ずつ合わせるとA4サイズに近い8頁の冊子ができる。縦位置か横位置の選択ができるが、それぞれを選んだ割合はほぼ半々だった。綴じるのは、冊子綴じ専用のホッチキスを用いた。



2-1



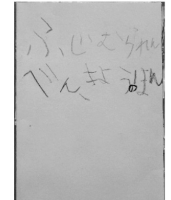
2-2

すでに日々の遊びの中で、絵本をつくった経験があるため、導入は簡単にした。前回のコラージュを、つなげてみたらどうなるかな？ という言葉がけだけでスタートした。制作はすぐに始まり（写真2-1）、クレヨンでの描画、文字の書き足しなどは、保育者が促すまでもなく、自分たちでどんどん進めた（写真2-2）。表紙までつくこと、できあがった絵本を子どもたち同士で読み合うことも、保育者のアドバイスを待つまでもなく、子どもたち自身の発想で次々と実践されていった。

A君は、一面のすべてに小さい数字が並べたが、次の画面をどうしていいのか戸惑ったらしく、貼る・はがすをくり返す。そのうちに、マクドナルドのチラシを見つけ、そこにあった大きなMを切り抜いて表紙に貼った。B君は、小学校での「学習」に関わるような教材や文具を集め、順に並べて貼っていき（写真2-3）、最後に「べんきょうのほん」と表紙にクレヨンで書いた（写真2-4）。Bの制作は1日では終わらず、3日目で完成した。



2-3



2-4

3 つくる、みる、うごく、かく & あそぶ

3 回目の実践は、〈見る〉行為のさらなる能動的展開を試みた。自分が〈見る〉ための道具をつくり、それで

遊ぶ、つまり、空き箱を使ってカメラをつくる。〈見る〉という行為にメディア（媒体）としてのカメラを介在させるのである。撮影したら写真ができる、さて、その写真はどのように表現したらいいのか。

実践 ③

“カメラをつくる、うつす”

日時：2017年10月19日、男児6名 女児7名（欠席の2名は翌週に実施）

時間的な流れは、以下のものである。

	<p>■素材と道具・教材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・折り紙 ・ガラクタ（カメラがつくれるような大きさの空き箱、プラスチックのケース類などの廃材） ・はさみ、セロテープ、蜜蝋クレヨン、マーカー ・用紙（厚手の画用紙の紙片）
10:00	<p>■導入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手遊び“アルプス一万尺”の後、保育者がポケットから折り紙でつくったカメラを出し、子どもたちを撮影。 ・子どもたちも折り紙でカメラをつくり、お互いに撮り合う。
10:20	<p>■実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ガラクタを見せる。 ・「これでカメラができるかな？」と言葉をかける。 ・保育者は、子どもたちがどのようなカメラをイメージするのか、楽しみに待つ。切りにくいところや、安全面でのサポートに徹し、彼らの内側からわき上がってくるイメージのじゃまをしないように心がける。
11:30	<ul style="list-style-type: none"> ・カメラを持って保育室を出る。
12:00	<ul style="list-style-type: none"> ・どこでどんな撮影をするのかは、子どもたちの発想に任せてみる。 ・保育室の片づけをして、昼食の準備に入る。 ・カメラは、自分たちの持ち物置き場に保管。

素材は、5歳児が扱うことのできる紙類を使用。空き箱も、はさみで切ることができる程度の大きさ・紙の厚さのものを用意する。厚手の画用紙を小さく切ったものを用意したが、これは写真用紙(印画紙)として使用する。

手遊びを導入として、折り紙で簡単なカメラをつくり、それで撮影することを体験した。その後、ガラクタを見せ、「これでカメラができるかな？」と問いかける。細かな説明をする間もなく、子どもたちはすぐに反応して、制作が始まった。素材を提示しただけで、具体的なアドバイスは必要なかった。箱を組み合わせる、くっつけるから始まり、覗くところ（ファインダー）やシャッターボタンまでつくった（写真3-1）。初めのうちは保育者にいろいろ聞いてくる子もいたが、そのうちに子どもたち同士で情報交換をして、お互いに協力して進めていくようになった。



3-1



3-2

箱に紙筒のレンズをセロテープで貼っただけの子は、他の子が箱の中にレンズを差し込むために、箱を丸く切り抜いたのを見て、自分も同じように箱を切り抜き、そこから筒状の廃材が入るようにした。きれいな丸ではないが、そこにレンズが入って覗けることにとても満足していた。カメラの中に、撮影済みの写真を入れることを試みた子がいて、それがたちまち全員に広がる。用紙(印画紙)は、あらかじめ用意していた画用紙の小さな紙片を使う子もいたが、あまった空き箱を四角い形に切り取り、それを“現像済み”の写真として描き込み（写真3-2）、カメラの本体にたくさん詰め込む子もいた。

「園の中を撮りに行こう」と言い出した子に他の子が賛同して、園内撮影が始まる。この動きは私たちも考えていたが、保育者が言う前に、子どもたちは自分たちで考えて行動した。弟や妹が乳児の部屋にいる子たちは、手製のカメラを持って昼食時間の保育室に入り込み、小さな子どもたちの食事風景を撮影。撮る子も撮られる側の子どもたちも大はしゃぎだった（写真3-3）。職員室で園長先生を、調理室で中の様子も撮影、まさに園の生活そのものが、子どもたち自家製のカメラの中に記録されていった。



3-3

4 であう、うつす、いんさつする

4回目の実践は、本物のカメラを使って、子どもたちが“今”見ている〈もの・こと・ひと〉を写し撮る。その後、データを子どもたちと保育者が一緒になって印刷する。撮ることと、自分が撮ったものが印刷されて現前化することを同時進行的に体験する、つまりライブ感覚でのデジタルカメラ体験である。この実践から、筆者が初めて“ヒゲおじさん”として子どもたちの前に現れ、二人の担任保育士と同じ立場で加わった。

実践 ④

“カメラで撮影、印刷する”

日時：2017年12月19日、男児6名 女児7名（欠

席の2名は翌々日に実施)

時間的な流れは、以下のである。

	<p>■道具・教材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・デジタルカメラ 13台 ・プリント機材(ノートPC、プリンター、用紙、予備インク) <p>■導入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・村上(ヒゲおじさん)が担任で紹介されて登場。 ・前回のカメラ遊びの話を子どもたちから聞き、つくったカメラを見せてもらう。 ・ヒゲおじさんは「本物のカメラを持ってきたよ」という会話が導入となる。 ・子どもたちの前で、カメラを出し、印刷のためのPCとプリンターもセットする。
10:00	
10:20	<p>■実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カメラを渡し、使い方を説明する。 ・カメラは落としたりぶつけると壊れるから、首からストラップで下げること、カメラを持ったまま走らないことを伝える。 ・まず友だち同士で撮影、その後の動きは、保育室の中の好きな場所、好きなものを撮る。その他、園内と園庭、続いて、近くの公園まで出かけることまでは予定しておいた。
11:50	<ul style="list-style-type: none"> ・園に戻り、SDカードを抜き、その場でインデックスを印刷する。
12:00	<p>■昼食</p>
13:00	<ul style="list-style-type: none"> ・お気に入りの写真を自分たちで選ぶ。 ・インデックスの中から、大きく伸ばしてみたいものを選び、マーカーで印をつける。A3で1枚、A4で2枚、A5で4枚。 ・それができた子から、お気に入りのポーズをとったところを担当が撮影。これもインデックス印刷をして、その中から自分で2枚選ぶ。
14:00	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが印をつけた写真は、1月ヒゲおじさんが持ってくることを約束して去る。

デジタルカメラは子どもたちの数だけ確保できた。ヒゲおじさんと子どもたちとの会話が、この日の活動の導入となった。また、プリントの機材は、子どもたちの目の前でセッティングして、その準備段階からワクワクする感じを子どもたちと共有した。カメラを渡して使い方を説明したが、簡単な説明だけで、すぐに理解できた。教えていないのに、ビデオ撮影のボタンを見つけた子どもいて驚かされた。

子どもたちの撮影は、まず友だちを撮る、保育室の中を撮ることから始まり、保育室を出て園内各所に進んだ。職員室に入る、給食室をのぞいて撮影(写真4-1)。さらには、工作のカメラの時と同じで、妹や弟を探して乳児室、そこから外に出て、園庭で遊ぶ小さな子たちを撮影した(4-2)。そして、天候も良いため、予定通り近くの中溝公園に撮影をしながら行った。公園では、いつも遊んでいる場所、遊具、木々、近隣の家などを撮影。最後に、担任が枯葉を集めて空に投げると、みんなでそれを撮った。使用したカメラは、タイムラグ(時間差)が生じるため、シャッターを押すタイミングが合わず、担任は数回、葉を集めては投げることをくり返した。帰

りの道でも撮影をしながら、園にもどった。

保育室ですぐに、1人ずつSDカードを抜き、その場で印刷してインデックスを作成(写真4-3)。この作業は昼食の間も続き、全員のインデックスの印刷ができた時点で配り、お気に入りの写真を選ぶ作業に入った(シ写真4-4)。インデックスの中から、大きく伸ばしてみたいものを選び、マーカーで印をつけたが、細かな大きさの指定は少々わかりづらかったようだった。それができた子から、お気に入りのポーズでの全身像を撮影。子どもたちが印をつけた写真と全身像は、年明けにヒゲおじさんが持ってくることを約束して終わる。

肝心な問題が一つ解決していなかった。それは、プリントした写真をどうするのか、だった。そのことがこの日までに決められなかった。以前、他の園で写真を使ったワークショップを行った時、子どもたちは自分たちの撮った写真にハサミを入れようとしなかった。今回のプロジェクトでは、事前にコラージュを体験しているため、そのようなことも可能かと考えたが、それを言葉がけ(指示)するには躊躇した。そこで、この写真をどうするのかについては、事前に何度か話し合ったが、結論が出ず、子どもたちの様子を見て、彼らにどうしたいのか直接聞いてみよう、ということになっていた。

ところが、公園で撮影をしている時にC君が、「撮った写真さあ、どうするの?」「ちゃんと印刷して写真になるよ」「写真はペラペラだから、ダンボールとかに貼って立てていけばいい、そうすれば“ホンモノ”みたいになるじゃん」「…」この時、一緒に聴いていた担任A先生と目が合い、「ええっ、何を考えている? ホンモノって何? でも面白い!」と独り言を漏らしてしまった。園にもどる支度をしている最中だったこともあり、それ以上はC君から聞き出すことができなかった。そのため、保育が終了した夕方、A先生とそのことを話し合った。A先生もとても気になっていたようだった。確かに自分の撮った大切な写真をコラージュのように切り刻むことはできないかもしれない。しかし、自分がやりたいことがはっきりしていれば、不必要なところをカットしたり、あるいは、見るだけの写真とは異なる使い方もできるかもしれない、となると…まず、C君の提案をそのまま子どもたちに伝えるしかない、そして、C君の提案をマケット(模型)として制作してみることにした。



4-1



4-2



4-3



4-4

5 みる、えらぶ、きる、はる、& たてる

5回目（最後）の実践は、自分のイメージに沿って画面を再構成する作業。これまでの〈見る〉体験をもとに、イメージのより高度な具現化を目指すため、幼児にとってはかなり難しい「課題」となる。そのため、何ができたのかという成果ではなく、新しい方法にチャレンジする気持ちとプロセスを第一に考えた。

実践 ⑤

“自分の写真で、立体コラージュ”

日時：2018年1月10日、男児8名 女児8名（全員参加※）

※この週から、新しく転園してきた男児1名（D）が加わる。彼には撮影した子たちの許可を得て、20枚ほどの写真を増刷してD君に渡し、気に入ったものを選んでもらった。彼はこの作業にとっても興味を持ったようで、何のためらいもなく作業にとりかかることができた。

時間的な流れは、以下のものである。

	<p>■道具・教材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの撮った写真+自画像 ・はさみ、スティック糊 ・空き箱（少し大きな菓子箱など）、画用紙や色画用紙の切れ端、包装紙 ・マーカー、蜜蝋クレヨン
10:00	<p>■導入なし</p> <ul style="list-style-type: none"> ・印刷した写真を配り、C君の提案を話し、マケットを見せる。 ・制作開始。 ・時間無制限の作業が続く。
12:00	<p>■昼食</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昼食後も制作は続く。

これまでの体験の積み重ねによって、道具の扱い方に慣れ、自由に自分の考えたものをつくる雰囲気にも馴染んでいるため、自分の写真（少し厚い紙にプリントしてある）を受け取ると、すぐに子どもたち同士で見せ合って会話がはずんだ。そして、C君の提案を私たちが伝え、改めて話すまでもなく、当然のようにしてその提案は受け入れられた。

つくってきたマケットを見せた。それは、空き箱の上に写真が立っていて、その背景に空と雲の写真が貼ってあるだけの簡単なもの。もちろん、説明もごく短く済ま

せた。すでに子どもたちはそれぞれのイメージを持っていたらしく、土台となるような大きな箱を探し（写真5-1）、すぐに制作が始まった。

初めのうちは賑やかだったが、そのうちに会話が止み、彼らは黙々と作業

を続けた（写真5-2）。それぞれの作業に入ると、会話は必要ないようだった。つくったものの中に自分の姿（前回撮影したポートレート）を立て始めたところから、少しずつ会話が復活して賑やかになり、子どもたち同士の意見交換も再び活発になった（写真5-3）。できあがったものは、ジオラマのような風景になり、全体としては自分たちの生活空間そのもの、あるいは子どもたちの日々の“物語”であるように見えた（写真5-4）。



5-1



5-2



5-3



5-4

1月27日に“こどもと楽しむ、造形活動”という園内の行事があった。これは、子どもたちの1年間の創作活動を保護者に見ていただきながら、同時に子どもたちの制作活動の中に大人も入って遊ぶ、という園の大切な行事である。この年長組では、これまでの活動の様子をドキュメンテーションとして展示し、そこでつくられたコラージュ、コラージュ絵本、自家製カメラ、撮影した写真、また最後につくった“コラージュで、立体”も並べた。これは、できあがったものをただ陳列するのではなく、子どもたちの制作する空間に大人（保護者）が加わって一緒に遊んだり（前稿で報告した図書館づくりがその例）、また今回のように、制作の様子などを子どもたちが自由に語る（写真5-5）。



5-5

ギャラリー・トークであったりする。つまりこの行事の在り方は、その年の子どもたちと保育者の関わりの中で1年をかけて少しずつ方向を定めていくものであり、最終的にどのようなものになるのかは、その年によって異なってしまうのである。

6 2つの問題提起

本稿は研究ノートであり、このような実践を通じた研究を継続していく予定であるため、今回の実践で感じた問題点を2つ提起するだけに留め、そこからの考察はこれからの実践の中で深めていく予定である。

1) デジタルカメラの使用について

幼児がデジタルカメラを持って撮影し、それを保育室の中でリアルタイムに印刷する、というような実践はそれほど多くないはずである。そのため、気がついたことを備忘録として列挙してみたい。①デジカメを幼児が使用することは難しくない。ただし、それなりの台数がないと実践はできない。また、子どもが扱えるカメラは、大きさ・重さ・操作性・安全性を考慮すると、それほど多く出回っていない。今回は、N社の子ども向け機種を使用した。安価で操作が簡単なこと、また衝撃・防水対策が施してあり、多少子どもがぶつけても壊れることはなかった。他のメーカーでも似たものはあるが、安価で購入できて幼児でも使えるものとなると、国内では数機種のみである。②カメラは〈見る〉ための意匠のようなもので、直接見ることに抵抗を感じても、カメラ（レンズ）を通すと意外なまでに躊躇しないことが多い。ちょうどサングラスをすると自分の内面が隠れたような気になり、他者に向き合った時に物おじしくなるのと似ている。幼児でもそれは同じで、カメラを通すことで、子どもたちの視線の持って行き方には、何らかの影響があるように感じられた。このことは、もう少し丁寧に検証していく必要があると感じた。③フィルム写真の場合、撮影から写真に至る作業は簡単ではなく、一般の人は現像所を経由しない限り写真を見ることができなかった。しかし、多くの家庭にプリンターがある現在、もう少し写真を印刷することについて、子どもたちにもそのプロセスをオープンにしても良いと思う。イタリアのレッジョ・エミリアの幼児学校²では、ずいぶん前からコンピューターやプロジェクター、プリンターを子どもたちに積極的に使用させている。

2) クレヨンについて

本研究の実践において、描画教材としてのクレヨンは、すべてドイツのシュトックマー社製の蜜蝋クレヨンを使用した。保育現場で一般的に使われているクレヨンを使用しなかったのは、以下の理由による。①使われている原材料や成分の表示があり、石油製品への依存度が低い

こと。②自然に近い彩度のもので、人工的で不自然な顔料を使用していないこと。③折れにくく、石油製品特有のベタつき少ないこと。とりえず気がついたのはそのような点であるが、幼い子どもたちが使う教材については、もう少し真剣に考える必要性を強く感じている。確かに、鮮やかで彩度の高い色は幼い子の目に入りやすいし、このベタベタした感触は、乳幼児にはある種の気持ちよさを感じるかもしれない。しかし、それでは、子どもが欲しがらる甘いものだけを与えるのと同じではないだろうか。そろそろ、子どもの成長過程における特性におもねるようなモノのつくり方を、教育や保育の領域にいる私たちは、批判的に検証すべき時期にきていると考える。

最後に、このような実践と一緒に試みてくださったY保育園の園長先生をはじめとするすべての教職員の皆様、また年長ぶどう組の担任である明栄先生と由紀奈先生には、心より感謝申し上げます。なお、本研究は科学研究費助成（基盤研究C／課題番号18K02642）の援助によるものであることを記しておきます。

注

- 1 拙稿「循環成長型アートプログラムの方法と実践 III」常葉大学健康プロデュース学部雑誌第12巻第1号2018年
- 2 佐藤学監修『驚くべき学びの世界』ACCESS 2011年。